



Title	オーラルヒストリーを用いた在日ブラジル人学校史の 試み：滋賀県日本ラチーノ学院を事例に
Author(s)	Fernanda, Balzacchi de Moura Moraes
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 39-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89320
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

オーラルヒストリーを用いた在日ブラジル人学校史の試み

ー滋賀県日本ラチーノ学院を事例にー

現代日本学 博士前期課程 1 年

Balzacchi de Moura Morais Fernanda

はじめに

1990 年の入管法改正に伴って、日本における日系ブラジル人が急激に増えた。日本で家族を形成したり、またはブラジルから家族を呼び寄せることも次第に増え、在日ブラジル人人口において子どもが占める割合が拡大した。日本の公立学校への不適応から不登校・不就学におちいった子どもや、そもそも学校に行かず自宅待機していた子どもが多かったことは既に明らかにされている [Hatano 2010]。こうした状況への対応に加え、帰国後の教育面での困難を避けるため、子どもたちの受け皿としてブラジル人集住県でブラジル人学校が 1990 年代後半から出現した。

しかし、ブラジル人学校の歴史はあまり記録されてこなかった。インフォーマルな形で始まったこれらの学校において、学校側でも文字資料による記録は少なく、日本社会のなかでもほとんど知られていない。学術的にも、ブラジル人学校は多くの研究の対象となってきたが、これらの学校の設立経緯や学校が経て来たプロセスはあまり注目を浴びてこなかった。さらに、学校の現状を調査する社会学・教育学・言語学的研究が多いものの、それらをつなげる通時的なアプローチは非常に少ない。

桶河 [2009] によると、ブラジル人学校は地域のブラジル人コミュニティのまとめ役として中心的な立場を占めるケースもある。入管法改正から 30 年経過した現在、在日ブラジル人コミュニティの歴史が問われるようになってきている。ブラジル人コミュニティの中心的存在である学校の歴史を理解することは、コミュニティ全体の歴史を理解することにつながると考えている。

そのために、文字資料の不十分さを補うためにオーラルヒストリーが有効な手法である。オーラルヒストリーとは、人の語りから、聞き取り調査を通じて、歴史的出来事を記録し分析する手法である。第 1 章では文字資料をめぐる問題点を提示してから第 2 章でオーラルヒストリーの適用について述べる。

第1章 文字資料の限界

まず、事例として取り上げる日本ラチーノ学院（以下：ラチーノ）を紹介したい。ラチー

ノは滋賀県に4校存在するうち、最も大きなブラジル人学校である。他の学校はNPO法人や私塾であるが、唯一準学校法人として認可され、幼稚園から高校まで合計200人弱の児童・生徒が通う学校である。現在は2011年に生徒減少によって閉校した東近江市立甲津畑小学校の校舎を再利用している。過疎化と高齢化が進む地域の人々との関係もよく、学校の経営に多くの日本人が関わっている。

ラチーノを対象とする先行研究として、ラチーノの甲津畑への移転とその後の学校と地域の関係に着目する中田〔2021〕が挙げられる。中田はラチーノと甲津畑の間で築き上げられた関係を中心に述べており、2015年の移転前後の時期のみを扱い、在日ブラジル人コミュニティにとって大きな節目となったリーマンショックや学校の設立経緯をはじめ、それ以前の経験には立ち入らない。しかし、ラチーノにとってのこの移転が持つ意味を理解するには、前述の経験を理解する必要がある。

では、文字資料をめぐる諸問題について述べよう。資料は大きく三つのグループに分けられる。一つ目は学校側の資料、二つ目は日本側の資料、三つ目はブラジル側の資料である。一つ目の学校側からの資料に関して言えば、「はじめに」でも言及したように、ブラジル人学校はインフォーマルな形として始まったケースが多い。ラチーノの設立経緯についても記録は残っておらず、最も古い資料は2000年に通った生徒の成績などといった書類のみである。

二つ目である日本側の資料はさらに二つに分けられる。準学校法人になる前に、ラチーノは私塾であったため、校舎の記録などは行政によると20年前の書類であるため発揮されているとのことである。次は新聞である。三大紙と京都新聞〔滋賀〕県民版を調査してみると大きな流れが見え、有効な調査手法であったものの、詳細まで確認すれば不正な情報や表記の揺れも含まれたため、決定的な情報源とは言えない。

三つ目のブラジル側に資料に関して、主にブラジル教育省の資料が挙げられる。1999年からブラジル国外の学校を認可する規定が日本でのブラジル人学校の出現をきっかけに作られた。申請書類には「学校計画」が含まれ、申請する学校の校舎、代表者、教員などについて詳しく記される。ラチーノは2001年に申請して2003年に認可されたので、2001年の学校の様子が書かれた書類にたどり着けるはずなのに、請求したところ教育省は2003年より前の書類を見つけないことができなかったとのことである。

このように、ブラジル人学校史の試みとして文字資料だけでは浅い分析しかできないことが今までの研究で明らかとなった。この問題を回避するために、オーラルヒストリーを手法として用いるとどのようなことが見えてくるのであろうか。

第2章 オーラルヒストリーから見えるラチーノの学校史

「はじめに」で述べたように、オーラルヒストリーは、聞き取り調査を通じて、ある歴史的出来事における人の記憶と経験を明らかにすることを目的とする手法である。そのため

に、「何があった」という事実確認にと留まらず、「当時どう思った」や「振り返って今はどう思うか」などという感情表現も含めて聞き取る。

ラチーノの学校史を明らかにするため、最も長く学校に関わっている現院長のカイオ・カミ・ムラ氏（1968 年生まれ）に 3 回にわたって聞き取りをした。カミ・ムラ氏は 2003 年に来日し、最初は北関東の工場で務めていたが、当時のエスニックメディアで滋賀のブラジル人学校での体育教員の求人を見かけて応募したことが「滋賀ラテン学園（当時の名称）」で働くきっかけであった。2004 年からカミ・ムラ氏は正式的に学校で教え始めた。ところが、2006 年に当時の園長は諸事情により学校と関われなくなり、まとめ役がいなくなった後、園長の役割を分担し、教員からなる評議会が作られた。そこでカミ・ムラ氏は経営の責任者となった。

2008 年のリーマンショック前に、ラチーノは近江八幡市にあった新しい校舎に移転した。以前の竜王町の校舎は元々漬物工場に使われていたが、カミ・ムラ氏が 2003 年に初めて訪れたときは 1 階にブラジル料理屋やブラジル食材店などといったエスニックビジネスがあり、2 階に学校があったと語った。移転先の近江八幡校舎は 5 階建ての商業ビルであった。校舎移動は急激な生徒増加と、以前の校舎の家賃滞納による明け渡し命令が理由となった。同年の末に、経済状況が悪化するにつれて、多くの労働者が失職して、わずか 1 年間で 100 人以上の児童・生徒が退学した。月謝の値下げもおこなったが、教員の給料も約 50% カットされたそうである。カミ・ムラ氏は児童・生徒の保護者と面談を行い、目の前で泣き崩れた保護者もいたと語った。彼にとって、当時のやるせない絶望と無力感が印象に残っている。

同時期に、カミ・ムラ氏は事実上院長となり、学校が存続できる方法を見つけるために滋賀県庁へ幾度断れながらも打ち合わせを要求し続けた。学校の改名もこの頃に行われた。当時の県知事による学校訪問もあり、結果として準学校法人の認可基準が緩和され、2011 年にラチーノは各種学校として設立された。認可後、近江八幡校舎は学校としては不十分な建物であったため、カミ・ムラ氏はより適切な学習スペースを探し続けた。政治家や大学教授をはじめ、認可手続きの過程で作られたつながりから、東近江市の閉校された学校の校舎再利用プロジェクトが検討されていたなか、ラチーノに使わせるというオファーがやってきた。

とはいえ、甲津畑町民の許可が必要で、地域住民との話し合いが 1 年間にわたって続いた。最初は抵抗があった。集落に外国人を招くことによって、よくテレビや新聞で報道されていた騒音問題など多くの迷惑が発生するのではないかという心配があった。しかし、当時の自治会による近江八幡校舎への訪問後、話し合いは抵抗から交渉へと切り替わり、地域住民の心配を解消するため、そして移転にあたってお互いの要求が話し合わされた。2015 年にラチーノは旧甲津畑小学校へ移転した。

この移転はラチーノと甲津畑にとって非常に大きな意味を持った。甲津畑小学校は、明治時代に地域で設立された学校であり、町民が何世代にわたって通った愛着のある場所である。校舎から子どもの声が響き渡らないことは何よりも悲しいと思われ [『城山』2011]、学校再利用といっても、学校として機能し続けてほしいという住民の想いもあった。一方、カ

ミ・ムラ氏によると、ラチーノにとってこの移転は「社会的に認められた」ことの証であった。この移転はさらに甲津畑町民との関係を深めることへとつながった。カミ・ムラ氏が聞き取り調査で繰り返し使った言葉として「一人では何もできない」が最も印象的である。これは、日本社会と切り離れた空間ではブラジル人学校は存続できず、多くの人の協力が必要不可欠という意味の主張である。

おわりに

このように、ブラジル人学校史を明らかにする目的には文字資料が不十分であることから、オーラルヒストリーを主な手法として用いた。このことから2003年から現在に至るまでの経緯を明らかにすることができた。

とはいえ、人の語りを手掛かりにする手法であるゆえ、覚え違い、忘却、「語りたくない」、「知らない」等もありえることである。ラチーノの場合、これは学校の創設者による「語りたくない」ことが代表的である。ラチーノが「いつ」、「どのように」創設されたか、まだ明らかになっていないことが多い。「いつ」に関して新聞を通時的に見ると、時期によってラチーノの創設年が異なり、情報を合わせるともっとも可能性の高い仮説として、ラチーノ1996年から託児所として機能し、2000年または2001年から学校として機能しはじめたと考える。「どのように」に関しては、創設者が「所属していた派遣会社の支援を受け」、学校が「開校した」ことが二つ以上の記事で書かれている。

以上のことから、オーラルヒストリーを用いることによって明らかにできたことが多いものの、まだわからないことが多く残っている。ここで見出した問題が学校史を考えるにあたって中心的であるので、引き続き研究を行う必要がある。

参考文献一覧

- 桶河優子 (2009) 「滋賀における在日ブラジル人学校の教育 BAU 学園の事例から」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』(12), pp. 137-147 滋賀大学教育学部
- 中田英樹 (2021) 「過疎化農村を多文化社会へ再生する日系ブラジル人学校—滋賀県東近江市甲津畑町の「ラチーノ学院」を事例として—」伊藤泰郎編『日本で働く—外国人労働者の視点から—』pp. 257-284 松籟社
- 東近江市甲津畑小学校記念雑誌 (2011) 『城山』
- Hatano, Lilian Terumi (2010) 'A Educação de Crianças Brasileiras no Japão - Desafios para os Próximos 10 Anos'. In Fundação Alexandre de Gusmão "Vinte anos de brasileiros no Japão" pp. 41-50. Brasília: FUNAG
- Ministério da Educação e do Desporto, Conselho Nacional de Educação (1999) Parecer CEBNº 11/99. Estabelecimento de normas para escolas brasileiras sediadas no exterior.